はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
VOL. 08
発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市大字双柳1-1　Tel (042) 973-2111
第8号　平成25年3月29日発行　　平成18年3月31日創刊

飯能の山車と植物を学ぼう

●第８号の特集は「飯能の山車（だし）と植物」

今回は飯能市内の山車と植物を取りあげました。飯能の山車については、前号の特集「飯能まつり」に続いて第２回目となります。

また、市内の植物については、加治丘陵の四季の植物を紹介します。『お宝スポット』を片手に市内を散策してみてはいかがでしょうか。

1 特集「飯能の山車」

飯能市文化財保護審議委員会委員
小槻　成克

1 **はじめに** お祭りに華を添えるのが、賑やかな祭り囃子です。飯能のお囃子の大半は、山車や屋台で乗演されます。飯能のまちなかのお祭りには、お囃子と山車・屋台が「つきもの」なのです。

2 **山車と屋台** 本来、山車は天上の神様がお祭りの日に限って天下る（あまくだ）際の目印であり、降臨された神様を乗せて氏子地域を巡る「移動神座」なのです。そのため目印として榊や御幣などを高く掲げているものが多く、飯能を含む関東では、中心である江戸東京にならい人形を目印とした四つ車（三つ車）の山車（江戸型人形山車）が広く流布しています。一方の屋台は、地上に降（くだ）られた神様をお慰め申し上げるため、芸事などを行う「移動舞台」で、車輪付きの土台に柱を建て、唐破風（からはふ）屋根が乗っている形状が関東では一般的です。

このような姿形も使用目的も違う山車と屋台ですが、江戸期の終わりごろには、お囃子を演じる舞台の付いた山車や、屋根上に人形を載せた屋台まであらわれ区別がつかなくなり、また名称も混同してしまい、地域によってまちまちに言いあらわしています。現在飯能地方では山車・屋台のどちらも「山車（だし）」と呼んでいます。

3 **飯能まちなかの山車** 飯能市域では明治の初めころ、南高麗地区間野、直竹地域での山車建造が始まりのようで、これは南高麗地区が以前から山車祭り

二丁目
江戸末（1860年代）に砂川村五番組（現立川市）で八王子型人形山車として建造。大正９年（1920）取得後平屋根屋台に改修され現在に至るも、永年実働で老朽化が進み、近年、文化庁補助事業による復原修復を実施（2010～2012）、神功皇后像を戴く当初の姿を取り戻した。市指定有形民俗文化財。

が盛んな青梅地方(東京都)と隣接している影響と思われます。その後、飯能市街地でも明治中頃には鎮守祭礼に山車を曳く町内があらわれます。現存の原町、河原町、三丁目の山車の原型は明治の中ごろ、それぞれ取得したそうです。

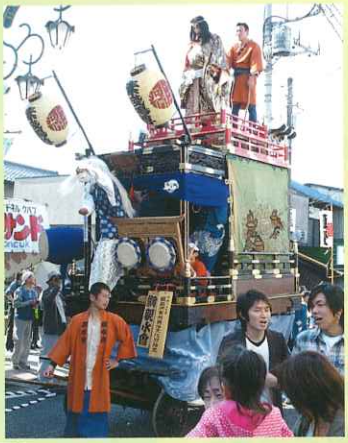
大正以降、山車の入手が盛んになり（一丁目、二丁目、宮本町）、神社祭礼はもとより大正御大典祭(ごたいてんさい)(1915)、昭和御大典祭(1928)、紀元二千六百年祭(1940)等の大規模祭典にも各町内揃って曳行しています。

戦後、早くも復興祭(1946)で山車祭りが復活すると、戦前には持ち合わせていなかった町内会(前田、柳原)が山車建造に動き、市制施行および両吾野・原市場合併祝賀祭(1957)、市制10周年・商工会館落成祝賀祭(1964)を経て、第１回飯能まつり(1971)では８台の山車が出場しています。その後中山、双柳、本郷と山車取得が続き、昨年(42回飯能まつり)は11台の山車が曳き廻され、ますます賑やかになりました。

4 **維持と管理** 山車は『和風建築物に人間を乗せて往来を曳き廻す』という特異な使い方のため、次第に駆動部をはじめとする各所が損傷するので、たびたび改修が実施されています。車輪や梶部分の修繕はもとより、近年では老朽化した山車の一部や全体を作り直すところも見られます。また、文化財として貴重であることから二丁目および河原町の山車と原町の山車人形が飯能市の有形民俗文化財に指定されています。

飯能まつりで活躍する代表的な山車

前　田
笠幡村(現川越市)發智(ほっち)家旧蔵の山車彫刻を基に昭和22年(1947)四重高欄・唐破風屋根・廻り舞台付山車として建造。盛留(もりどめ)には諫鼓鶏(かんこどり)が。屋台の舞台と山車の鉾台が融合した特異な例。



河原町
明治30年(1897)浪花屋(なにわや)七郎兵衛作の三重高欄・欄間仕立で素戔嗚尊(すさのおのみこと)人形を戴く江戸型人形山車を37年(1904)静岡より購入。本年度より大規模改修に着手。市指定有形民俗文化財。

原　町
原型は明治20年(1887)建造の欄間仕立江戸型人形山車で、26年(1893)より三代原舟月(はらしゅうげつ)作の神武天皇像(市指定有形民俗文化財)を飾る。昭和55年(1980)現在の入母屋屋根に改修し、様相一変。

柳　原
昭和22年(1947)に単層唐破風平屋根の屋台として建造。平成に入り屋根取換、車輪車軸取換、彫刻補充等大規模な改修が続き、特に昨年(2012)は念願の廻り舞台併設にいたる。

宮本町
大正14年(1925)高麗村横手(現日高市)の岡野桂之助により単層唐破風平屋根・廻り舞台付屋台を建造。桂之助は一丁目屋台(1920)も手掛ける。堂宮彫師・佐藤光重の彫刻が見所。

三丁目
加藤清正像付の八王子型人形山車を明治中ごろ多摩地区より購入。大正４年(1915)に平屋根屋台に改修し祭礼に参加していたが、本年(2013)彫刻、車輪を残して新造に近い大改修をほどこす。

飯能市は植物の宝庫(Ⅳ)―加治丘陵の植物―

埼玉県立入間向陽高校 教諭
山下　裕

1 **はじめに** 『はんのうお宝スポット』創刊号の特集「飯能市は植物の宝庫」では、市内の残っている自然林を、(Ⅱ)では二次林について、(Ⅲ)では特徴的な植物を紹介しました。今回から3回に分けて(Ⅳ)加治丘陵の植物　(Ⅴ)天覧山・多峯主の植物　(Ⅵ)名栗の植物　という形で市内に自生している植物について紹介します。

2 **加治丘陵** 加治丘陵は、関東平野と山地との境にあたる丘陵です。標高の一番高い所は青梅市と入間市・飯能市境付近の203.5m（いわゆる二〇三高地）です。西側は青梅市霞丘陵から永山丘陵に続き、東側と南側は入間市に含まれ、特に南側の台地に占める広大な茶畑は、入間市特有の景観をつくっています。飯能市は丘陵の西北部の地域で、入間川でつくられた扇状地の扇頂（旧市街）に位置し、その中央には台地が広がっています。飯能市が占める割合はそれほど多くはありませんが、豊かな植物相をつくっています。

3 **加治丘陵の植物（早春編）** 3月の下旬から4月上旬、コナラやクヌギなどの雑木林中にいち早く花をつける植物が見られます。それらの木々が葉をつける前、林床で花が咲き夏まで葉をつけ、林床や地中で過ごす植物です。これら植物をスプリング・エフェメラル Spring Ephemeral（春の妖精）といいます。1年でこの短い時期に見られる植物です。代表的な植物は、**イチリンソウ**、**ニリンソウ**、**アズマイチゲ**、**トウゴクサバノオ**などのキンポウゲ科。**ヤマエンゴサク**、**ジロボウエンゴサク**、**ムラサキケマン**などのケシ科。**カタクリ**、**ヒロハノアマナ**、**アマナ**などのユリ科。それからメギ科の**イカリソウ**などがあげられます。

ヒロハノアマナ

雑木林の下で最初に咲く花は、**アオイスミレ**です。淡青色の半開きの花をつけ、目一杯自己主張している姿が可憐に見えます。

カタクリ、**イカリソウ**については、以前に紹介しました。市の天然記念物に指定されている岩渕地区から落合の薬師堂近く、また阿須の私有地など、その群落は見事です。加治中学校の校歌にもカタクリが歌われているので、この近くで見られたのかもしれません。

少し遅れて**イチリンソウ**。この花もカタクリと同じところに咲き出します。阿須のグラウンド近くの雑木林の中にも咲いていました。今では花をつけることはありませんが、細々と生活しているようです。

低木には、ピンク色の小さな花を沢山つけた**ヤマウグイスカグラ**や、ヒトの手が届かないがけ沿いには**ミツバツツジ**の紫色の花が、遠くから目に入ります。

入間川土手沿いには、**タチツボスミレ**、**クサボケ**の花に混じって、**アマナ**の繊細な姿がみられました。護岸工事で、少なくなってしまったのは残念です。

沢沿いの植林地に行くと、わすれな草の仲間である**ヤマルリソウ**の花や、大きな細長い葉をつける**ナガバノスミレサイシン**の薄紫色の花を見つけることができます。

ヤマエンゴサク

ヤマルリソウ

これら早春の植物は草丈が50センチ以下で、枯れ野の中にいち早く彩りをつけるので、すぐ目につきます。

4 **加治丘陵の植物（春編）** 早春の植物の盛りが過ぎると、春植物が見られます。里山の植物として話題になった仲間です。これらの植物は、ヒトが林の中の落ち葉かきをしたり、笹を刈ったりして林床を明るくすると出てきます。**キンラン**、**ギンラン**、**ササバギンラン**、**サイハイラン**などのラン科。また植林地の沢沿いには、紫の花をつけた**トウゴクシソバタツナミソウ**や**エビネ**など、また入間市と飯能市の境には、**ウメガサソウ**などが、運がよいと見られます。

キンラン

5 **加治丘陵の植物（夏編）** 夏になると、草丈の大きな植物が目につきます。林の中よりも林縁に良く見られます。**ヤブカンゾウ**の朱色、**オカトラノオ**や**ヤマユリ**の白色など、大型植物なので見分けが容易です。

6 **加治丘陵の植物（秋編）** 秋になると、花とともに果実が色づきます。花は**シラヤマギク**、**シロヨメナ**、**ヒヨドリバナ**、**ヤクシソウ**などのキク科。**ツルリンドウ**、**リンドウ**、**センブリ**などのリンドウ科。**ヤブマメ**、**ヤブツルアズキ**、**ヤマハギ**などのマメ科。

果実では、**ツルリンドウ**、**ガマズミ**、**オトコヨウゾメ**の赤い実。**ムラサキシキブ**、**ヤブムラサキ**の紫色の実。**オオバタンキリマメ**の開いたさやの端につく赤褐色の実。11月下旬から良く林の中で見られます。鳥にその実を食して、種子を遠くに運んでもらうため、より一層カラフルになってきます。

オオバタンキリマメ

7 **番外編** 地味な植物で、あまり目に入らないが、珍しい植物。それからつい最近、県内で初めて自生が確認された植物があります。

前者の代表的なのが、イネ科の**ハイチゴザサ**、イラクサ科の**トキホコリ**、シダ植物でウラジロ科の**コシダ**などがあげられます。その生育地はすべて入間市側ですが、後者の代表が**ヒメフタバラン**で、これは飯能市側です。

ヒメフタバラン

加治丘陵は市街地に近く、四季それぞれ多様な姿を見せてくれます。自然を体験しに是非足を運んでみて下さい。